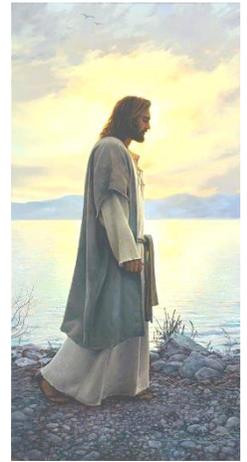


＜ 癒されない不信仰を越えて ＞  
ヨハネ 12:36-43

36-37 節

主イエス様は、なすべき御業をすべてなし、人々に語るべきみことばを全て語り終えられた。

その結果、人々は造り主なる神がお送りくださった神の御子イエスを信じたかという、そうではない、「彼らはイエスを信じなかった。」



**人々がイエスを信じなかったのは、預言が成就するため**

「主よ。私たち(預言者)が聞いた(聞いて語った)ことを、だれが信じたか。

主の御腕(力)はだれに現われたか。」 (ヨハネ12:38b、イザヤ書53:1の引用)

イザヤは、自分勝手に歩むの民の罪を身代わりに背負い、苦しめられて殺される神のしもべである救い主の姿を語った。それは、まるで十字架のイエスの姿。しかし、民は信じなかった。

自分勝手なメシア像を抱いて、離さない民に、「主の御腕(力)は誰に示されたのか。人々が憎しみの中で殺したこの人においてではないか。」と語る。

「…彼らはその目で見ること、心で理解することも、立ち返ることもないように。

そしてわたしが彼らを癒やすこともないように。」

(ヨハネ12:40b、イザヤ書6:9-10の引用)

神がユダヤ人の心を頑なにされたのなら、それでは、私たちの信仰と救いは、神が私たちの心を信じるようにさせるか、信じないようにさせるかに運命づけられているのか？

これは、イザヤが預言者としての召命を受けた時に語られたことば。「わたしのことばをこの民に語りなさい。」と命じられると同時に「あなたの語る神のことばを人々は聞かない。」と言われてしまう。

「…そしてわたしが彼らを癒やすこともないように。」 (12:40b)

**神が癒しを拒否されるという裁き**

裁き…有罪か無罪か、理にかなっているか・いないか…を明らかにすること。

イスラエルの民は、すでに不信仰の道を歩み続けていた。

不信仰そのものが、すでに裁きであり、滅びだと言える。

不信仰は神によってしか癒されないといことを私たちは、わきまえているだろうか。

自分で不信仰から抜け出せると侮ってはいないだろうか。

**癒されない不信仰が主イエスを殺し、**

**その主イエスの十字架が不信仰の癒やしをもたらすものとなる**

癒されることのない不信仰は不信仰以外のどこにも出口を見いだせないという事実を突きつけられたのは、有罪の人類を罰するためではなく、有罪である者を救うためだった

「しかし、それにもかかわらず、議員の人たちの中にもイエスを信じた者が多くいた。ただ、会堂から追放されないように、パリサイ人たちを気にして、告白しなかった。

…彼らは、神からの栄誉よりも、人からの栄誉を愛したのである。」 (12:42-43)

人に受け入れられることを愛して、イエスへの信仰を告白しなかった彼らもまた、不信仰の人々に数えられる。今朝の個所には、不信仰しか見られない。

「自分に光があるうちに、光の子どもとなれるように、光を信じなさい。」 (12:36)

ヨハネは、イエスの十字架の死と復活から数十年後の教会に向かって語りかける…



あなたがたは、死からよみがえられた主イエスの声を聞きとって  
信仰を持ってここにいる。

決して乗り越えられないはずの聖さと罪の分断を越えて不信仰を癒やすのは、

癒されない不信仰を背負って身代わりに裁かれてくださった

神のひとり子イエス・キリストだけだ。

今、主イエスのことばを聞くすべての人よ。この世の光イエスを信じなさい。